

# 百姓一揆をめぐる浮世草子

——『今川一睡記』を中心に——

## 一

正徳期の浮世草子に苛政・百姓一揆等を扱う作が多出したのは、長谷川強氏の指摘する所である。<sup>(1)</sup>この点については歴史の方面からの発言があり、林基氏は<sup>(2)</sup>

翌正徳三年（一七一三）に、野村増右衛門事件を思わせるところもある百姓一揆を筋の一部を含む最初の浮世草子『百姓盛衰記』が八文字屋本として公刊され、刊年や発行所を記さない同種の作品『農民太平記』もほぼ同じころの出版と推定されている。合法的に出版される浮世草子に、百姓一揆がとりあげられるようになるのは、このような現象が当時の民衆の強い関心を集めうるテーマとなっていたこと、農民闘争に対する市民の同情的態度を示していると思われるが、（略）としてゐる。要するにこの時期の浮世草子が現実に起った一揆等を背景にしているということであるが、ここに名前の上った「野村増右衛門事件」と浮世草子については別稿を用意した。（『近世

倉 員 正 江

文藝』四六掲載予定）しかしその他にも影響を与えた現実の一揆としては、これからとり上げる水府宝永一揆がある。この一揆自体の研究は、史料の乏しい野村増右衛門事件と異なり、相当詳細なものがあるが、これを扱った浮世草子については言及されたことがない。そこでまず、この一揆を専ら扱う『今川一睡記』（正徳三年正月中嶋又兵衛刊）について考察してみたい。

## 二

正徳三年閏五月六日に際物・時事小説に対する禁止令が出されたことからみられるとおり、宝永から正徳期にかけては際物的な浮世草子が流行した。特に赤穂義士・柳沢騒動物については従来研究が備わり、『今川一睡記』（以下『一睡記』と略す）もこれらと無関係ではない。前者に関して言えば『一睡記』は、浅野内匠頭を塩治判官、吉良上野之介を高師直、大石内蔵之助を大岸宮内とするなど、全体を赤穂義士物として仕立てている。また末尾を、

…夜ものはく」と曉の。鐘のひびきに今川孝宗枕を上。扱は夢にて有けるよな。我日比師直がふるまい。権をもつて民くするしめる事を思ひ。又高貞の家来に大岸宮内へ。慈悲ふかき者と聞伝へしが。心に思ふ事ハ夢にミると世俗の詞に違はず。扱もめづらしき春の夜の夢：

と夢の趣向でまとめているのも注意される。ここが『今川一睡記』との書名の由来になるわけだが、この通夜物語の趣向で想起されるのは何と言っても柳沢騒動の原始的実録『日光かんだんの枕』であろう。しかしこの場合は、浮世草子『頼朝三代鎌倉記』（正徳二年正月八文字屋八左衛門刊か）から直接の影響を受けたと考えてよからう。本書は時代を源頼家の頃に設定しているが、『日光かんだんの枕』の影響を受けた、柳沢騒動に取材した作品として知られている。つまり全体を、頼家の家臣八枚主水之助が鶴岡八幡宮に参籠して夢見たこととしているのである。また『一睡記』は巻二の二「菅野伏見洪水の事」に、

…八月十七日の夜亥のこくばかりに。そよ／＼と東風吹出しぬ是時ならぬ。風の吹やう…（略）…扱も存じもよらぬ風雨によつて洪水とへなれり。誠に時のまの騒動大變前代未聞なり…

と伏見辺の大洪水の様子が詳細に描写されているが、これは事実によつたもので、『月堂見聞集』巻之六に、

○（正徳二年）八月十八日夜曉に至る迄大風雨に付、膳所淀の御城水入、此の外所々の堤一時に切れ候に付…（略）…在々家潰家流家其の数不レ知、依之死人等何千人とも不レ分、…

（略）…今度の如くなる義は、百年以来無之由古老申伝候。とある記事がそれに当たる。この大洪水はすでに『商人軍配団』（正徳二年冬刊か）にも扱われているが、これにより『一睡記』も正徳二年八月以降の成稿であると知られ、『頼朝三代鎌倉記』を参照した可能性は考えられる。

宝永七年から赤穂義士事件の劇化が流行し、それに乗って浮世草子でも『けいせい伝受紙子』（宝永七年閏八月刊）等の義士物が出た。故に、『一睡記』を義士物として見た場合は、いささか時機を逸した観を免れず、やはり『一睡記』の主眼は水府宝永一揆—松波勘十郎一件—<sup>3</sup>の方にあると見るべきであろう。しかし、『一睡記』で松波勘十郎をモデルとした藤浪甚十郎を、高師直の家来とするのは『けいせい伝受紙子』で、野村増右衛門をモデルとした野沢政右衛門をやはり師直の家来とするのをまねたものと考えられることを指摘しておく。両書は、赤穂義士物に更に別の実際の事件—領民に対する苛政が原因で処刑された人物—を組合わせた点において一致している。

### 三

『一睡記』が水府宝永一揆をいかに小説化しているかを考察するために、まずその梗概を示す。

足利尊氏の子千寿丸の附人今川孝宗は毎夜寝所で読書に励む。（以下孝宗の見た夢となる。）細川勝忠の歩行者を殺害した浪人の引渡をめぐり、高師直と勝忠双方乱闘。勝忠の智略で浪人は切腹。讃州真言寺の衆徒公事に及び、勝忠の甥頼之、師直

の子息師安が担当となる。師安は頼之が路を取込んだと思込むが頼之は賀茂堤の普請により疑念を晴らす。(巻之二)

千鳥城の主塩治判官高貞は中国に威を厚くし、家臣大岸宮内、その子力太郎ともに主君によく仕えた。宮内は相役の大野彦左衛門とその子彦太郎と対立する。広島出身の藤浪浪十郎なる浪人、塩治家へ仕官希望するも拒否され高家へ奉公、領内で運上金を搾取する。折しも大洪水が起こり百姓達は困窮、彦左衛門は御茶屋保護のため多数の百姓を水死させるが、宮内は御用の材木で助舟を造り百姓を救う。宮内は水損の百姓へ借米を行い感謝される。一方彦左衛門支配所の百姓は困窮から強盗となる者多出、梟首された首が狐に取付かれしゃべるといふ怪異現象が起こる。(巻之二)

甚十郎は七郷の延年講の棟梁徳介から巧みに懸銭をまきあげ、庭の松を所望するなど音物を取込んでいた。一方裕福な百姓町人等に領内の非人の子を奉公させるなどの政策で表向は繕い、新川の掘抜き工事を計画した。延年講の懸金返還を求め庄屋等七人が訴えるも、五人は成敗、二人はその場はあやまり証文を書いて逃がれ鎌倉へ直訴の用意をする。(巻之三)

ある時頼之のもとに女が甚十郎の苛政を直訴する。加えて七村三千二百人の百姓が農業を中止して鎌倉へ訴訟に向く。母方の伯父の所へ逃げていた甚十郎は召取られ、隠悪露頭する。直訴の女は石本弘忠の妾で甚十郎が惣領君の人形を作り調伏したことを暴露、甚十郎は成敗される。一方高貞は尊氏より等寺院建立の奉行役人を蒙り、入用銀として稻村江太夫なる者先祖

伝来の土蔵を差出し扶持をもらう。(巻之四)

師直は銅を黄金にかえる男を召連れ尊氏の御前に出るも、弘忠に見破られ退散、男を成敗し蟄居する。高貞の御台所が天下無双の美女なる由を耳にし恋文を通わす。高貞を失脚させ亡き者にせんと計るも、高貞に恨まれ刀傷を受く。高貞は切腹に及び、宮内等家臣は仇討の機会を窺う。一味四十七人は師直の首を取り亡君高貞の墓へ手向ける。以上はすべて今川孝宗の夢であり、宮内の忠義を頼もしく感じるのであった。(巻之五)

藤浪甚十郎が登場するのは巻二の二、処刑されるのは巻四の三であり、計十章が水府宝永一揆を扱ったものである。当時の出版事情では武家方の事件をストリートに取上げることは不可能であった事は言うまでもないが、『一睡記』の著者は相当詳しく一揆の全貌をとらえていると言える。

水府宝永一揆についての研究は松波勘十郎なる人物に興味を持たれた林基氏が、精力的になされた。しかしこの松波勘十郎なる人物については不明な点が多く、特に水戸藩に登場する以前が掴みにくい。林氏の研究を整理すると、

①美濃加納宿の出身であったこと。

②三河藩、郡山藩、三次藩、棚倉藩等で、検地や藩の財政改革に関与するという、諸藩をまたにかけた活動をした人物であったこと。

といった程度のことしか確実視されていないのである。『一睡記』では甚十郎は、

…元来安芸広島の生れで先祖へ。成程武家にして持槍をもか

づかせし者の子孫なれ共。そのうち沈淪して親へ佐伯の土民なりしが。甚十郎母かたの縁をもとめ。先祖の名字を取出し。何とぞふたゝび武士に立かへるべき所存出来て。：

という出自の人物となっている。前述の如く、松波は一時三次藩に雇われているが、この藩は広島藩の支藩で当時の藩主は浅野長澄であった。故に広島と全く無関係ではないと言える。ただし実際の松波家は加納宿の庄屋クラスであるから、さして没落してはいたわけではない。

ここで問題になるのは『一睡記』ではさらに、

…甚十郎殿の人跡無骨ならず。そのいぜん堂上方につとめ申されてのち。当地へありつかれしときく。何さま歌のはし／＼をもおぼへて心さのミいやしからず。：

と、徳介の口を借りて、甚十郎が堂上方に關係のあった人物、としている点である。この点については、以下の点と考え合わせるとおもしろい。『一睡記』では甚十郎について、

…一國の資財を集私欲して。難波に母方の伯父医師と成有したが。其方へたまる金銀をひそかに遺し。大坂の商人へ家賃取て金を借して利徳を取しとかや。：

という風聞を載せている。これは前述の如く、彼が仕官の折「母かたの縁をもとめ」たということ、加えて、悪事の露頭した甚十郎が、「伯父道鉄方へ立退」いたということと合わせて、甚十郎と上方商人との結びつきを示していると読取れる。堀江文人氏の紹介した史料では、三次藩の財政について、

…御領困窮、殿様大借銀御難儀二付テ、松浪勘十郎ト云者ヲ

仕置者ニ京都ヨリ御雇：

とある。これが元禄十二年のことであるが、三次藩は元禄十一年に広島藩の保証で大阪の大字屋から借財しているとのことである。この時代の大名貸の盛行については言を俟たないが、以上の情況から林基氏は、「いったいどうして彼はこれらの藩にやとわれるようになったのであろうか。(略)：これらの藩に融資していた大阪の大字屋などの豪商が債権確保のためにおくりこんだのでもあろうか」と推測された。推測の域を脱するには史料が乏しいが、『一睡記』では、甚十郎が何らかの形で京都世界とかかわりを持っていたこと、背後に上方商人が存在していたことが暗示されている。なお一揆によって水戸藩を罷免された松波が京都に立ち戻ったことは諸書に見え、事実であったと思われる。『一睡記』はこの点も取入れている。

次に水戸藩における松波の改革についてである。彼は宝永三年に財政窮乏打開のため雇用された。しかしその改革が農民たちの不満を招き、水府宝永一揆と呼ばれる宝永六年正月の惣百姓江戸出訴を引起こした。この闘争については相当数の文献が残されており、近世民衆運動史上看過出来ない存在である。それらについては林氏が分類整理されており、この一揆の全貌については研究も進んで来ている。そこでまず、『一睡記』に見える甚十郎の事跡をまとめてみると以下の如くである。

①高師直方へ「勘弁積かたの役人」として奉公する。

②領内に松を植えさせ松煙を取る、木綿を作らせる、海辺では魚油を取るなどさせてそれぞれ運上を納めさせる。

③一里塚として松を植えさせるも木陰の田畑の收穫が出来ず、失敗に帰す。

④諸人より賂を受けない旨を城主に神文として差出すも、裏では音物を取込む。

⑤集めた金銀を大阪の商人に貸して私腹をこやす。

⑥七郷の延年講の懸金を取上げ返さない。

⑦徳介方の松の太木を好み、所望する。

⑧領内の非人の子供を裕福な者に奉公させる。

⑨運送の便のため、舟の通路として新川を工事すべく計画する。

⑩七郷の庄屋等延年講の懸金返還を求めて甚十郎に訴えるも入牢させ打首にする。

以上が甚十郎の行動である。まず①は、

…当時鎌倉の諸大名に馳走なさるゝ。勘弁積かたの役人はハ我百姓の子にて。田地のつもりかたはかてんのミちなり。御身上向の勘弁工夫つもり方の役人と申立にして。…

と記述されている箇所である。松波は算術に長じた人物だとするのは、後述の『元正間記』他がある。松波はあくまで藩の財政改革を推進すべく雇用されたのであり、『一睡記』の記述もそれを踏まえたものであらう。次の②については、要するに商品作物を奨励して雑税を取るといふことである。こうしたことが行なわれた可能性は充分あらうが、具体的には諸書には見えず、『御改革訴訟』等の文献に載る農民の訴状にもあげられていない。ところが『元正間記』は、この「運上の取立」が、松波の悪事の最大なるものの如く言う。また③とも関連するが、実際の松波は松を植

樹したのではなく、伐採したことは前述の訴状や諸書に見える。たとえば『水戸歴史譚』<sup>(8)</sup>では、『中村雜記』等を引用し、

…勘十郎水戸城下の松、及緑岡下町馬場等の松、悉く剪伐す、又城内の松をも伐んとす、老臣某之を止めて伐らず…

とある。『一睡記』では何故か逆になっているが、松波と言えは「松」のイメージが強かったらしく、⑦などもそこから作られたのであらう。④⑥については諸書に見えず、農民の訴状でも松並の収賄を指摘する箇所はない。⑧は変わった改革だが、諸書には見えない。⑤については前述した。⑨については

…是より隣国へのぼる荷物を。牛馬ばかりにて運送する事。

ことの外駄賃かゝりて自由ならず。駒里の川辺より舟の通路の成やうに。新川を掘ぬき舟にて万事をのぼする時ハ。此所のはんじやう…

とあり、『一睡記』ではあくまで計画段階に止まったものの如く記されている。しかし実際にはこの運河開発こそが、松波の苛政の最たるものと見なされていたようである。この運河跡は今でも地元で「かんじん堀」「勘十郎堀」がなまったものと呼ばれ、さらに水府宝永一揆自体、地元では「堀割一揆」「新川一揆」と呼ばれている程、この計画が一揆の引金となった。江戸出訴の際、百姓側の代表上吉影村の藤衛門が、吟味役の勘定奉行師岡与左衛門に向い、「…先御国困究又ハ上之御不益ハ此新川ニ相究リ申候…」<sup>(9)</sup>と申立てたのを見れば、それが理解されよう。『一睡記』はこの点をも踏まえている。最後の⑩も『一睡記』の創作であらうが、『御改革訴訟』等によると、松波が改革

に反対する者を入牢させたのは事実であった。

以上主として『御改革訴訟』や林氏の研究を参考にして『一睡記』の記述を見てきたが、ここで『元正間記』の記事を取上げた<sup>①</sup>。「藤井紋太夫松波勘十郎の(か)事」よりの抜粋をあげてみる。

：其頃江戸に松波勘十郎と云者出生之程ハ相知れず…(略)：算術に妙を得国々の地利を能く知って、手跡は能弁舌は勝れたり…(略)：山を切廣げ新田開発し諸運上を稠舖取上ケ、いかにも公義の御為にも可能成様に見得し所ニ民百姓の痛に成て諸役運上の為に大キニ苦シミに成に覺り、其上藤井と示合せて新規悪運上を取上る哀數ケ条也…(略)：諸役運上少も滞る者をハ水牢を作り是へ入、家屋舖を取上る下の歎ハ大形ならず…(略)：近年水戸へ来て上の為と申立て民百姓を苦メ悪運上を取立候段前代未聞の曲者也…(略)：討首被仰付者なりとて松波は穢多の手ニ懸り獄門に成に覺…

本書は、当時の雑説を集成したものとして浮世草子研究にもよく利用されるが、史実とつきあわせると明らかな誤伝があることも知られている。この松波に関する記事も比較的簡単なもので、水府宝永一揆研究の史料としては第一級のものでは決していない。しかし当時の松波評を窺う点では有効であると考ええる。ここで特徴的なのは、松波の悪事が前述の如く、諸々の運上を取上げた点にあることを、数回繰返していることで、その具体的な内容については触れられていない。諸書に見える松林伐採や運河計画には全く言及しておらず、松波逮捕の直接の原因となった江戸出訴に

ついても、これ程の事情通である著者ならいくらか情報収集し得たはずなのに書かれていないのである。ただし、水戸城下の赤沼牢屋で獄死したことは『松波勘十郎入獄次第』等に見える史実であるのを、ここで打首するのは、もとより『一睡記』がそうなのであるが、当時そうした風聞があったとも考えられる。あるいは、『元正間記』の著者は『鎌倉三代記』(前出『頼朝三代鎌倉記』のこと)が『日光邸鄢枕』を粉本としていることを指摘し得る人物であるから、『一睡記』に目を通していた可能性もある。いずれにせよ、当時松波の改革リすさまじい擄取と考える向が多く、刑死を当然のこととする見方があったことが『元正間記』から理解されよう。

最後に江戸出訴について言及しておく。『一睡記』では、

：高師直手下の百姓…(略)：鎌倉へ馳下り。段々師直やかたへ御頼書指上るといへ共。甚十郎方々役人方取次衆へ賂を積て。非を理に申通るゆへ曾而取上なし。…(略)：七村三千式百人の百姓、濃業を止追々に鎌倉へ下り。兎角殿のおやしきにてハ御取上ケなき上ハ。諸国御吟味役の頼之様へ御願ひ申が外なしと皆一同して。藤浪が悪事廿ヶ条書立。…(略)：口上書を以て御願ひ申上れば。御吟味有て仰付らるへきよし承り届。皆々悦び宿所へかへりける。…

とある。百姓達が師直邸に直訴しても埒があくまいと考え、頼之に仲介を依頼して訴状を受理された、というこの経過は、江戸出訴の実際の経過と類似している。宝永六年正月十六日、百姓達は、將軍綱吉の死去で忌中の水戸家は避けて、分家である守山藩主松

ったことが知られている。

#### 四

以上『一睡記』について、史料を基に若干の考察を加えてみた。本書は公刊本という制約を考慮すれば、浮世草子中でも実際の事件を相当ストレートに取扱った作品という評価ができる。それも松波一件についてその背景をかなり深く理解している作者の手になっている。以下登場人物像について言及したい。

たとえば、甚十郎については、

：元来甚十郎邪見にして私欲深く。世間体にかしく金銀を集る方便。下のいたみをかへりみず殿のお為にかこつけ：

(略)：是我身の悪のあらわれ牢人の時立退居所のたくわへ。

武士の身の仮にもせまじき事ぞかし。

(巻二の二)

：去年の大水に村里そんじて困窮大かたならず城主高の節直の所為のみにあらず。藤浪甚十郎と云者百姓の痛をかへり見す。課役の新規何ほどか思案仕出せしゆへ。うわべより内証のいたミとへなれり。：

(巻三の一)

と、一貫して批判的な態度を示している。しかしまた、甚十郎は、  
：甚十郎分別して。とても某武士の子ならねば、武芸を何ほど芸古したり共知行になるほどの事ハ有まじ。(巻二の二)

と考えて自分を「勘弁工夫つもり方の役人」をして売込むなど、よく時流を悟った人物としても描かれている。元禄期以降は特に諸藩とも財政面の困窮が著るしく、財政再建のため経済の知識に明るい者を抜擢するのだが、それが古くからの勢力者たる家老連

平大学頭頼貞に本家への取次を依頼するも拒否される。しかし同志の数も次第に増加したので再び二十四日に百姓側の代表三人で頼貞に訴えると、「旨義御せんさくの上則訴状御取上被仰付候は訴状趣尤ニ被思召」(『御改革訴訟』一) 水戸藩邸に取次いでくれたのである。この頼貞の仲介なくしては一揆の勝利は困難であったことは想像に難くない。つまり『一睡記』の節直は、水戸藩主綱条、頼之が守山藩主頼貞の面影があると言える。また出訴した百姓総数を「七村三千二百人」とする『一睡記』の記述について言及してみたい。この「七村」はあるいは常陸七郡を踏まえているかと思われる。そしてこの「三千二百人」であるが、実際はまず北領から三百余人が江戸へ出、後から南領からも上った。「これらの人数については、一村三人ずつで三千五百人といい、あるいは八千人ほどという伝えもあるが、これらはいずれも誇張のきらいがあり、信用することはできない。」<sup>(13)</sup>と書かれている。一応『御改革訴訟』一に「同廿四日ニハ南領北領の訴訟人都合千五百人程ニ重リ：」とあることから実際は千五百人程度だったとされている。ところが、『月堂見聞集』巻之一末尾に、

○正月廿日過より、水戸百姓三千人程、江戸水戸様御家數へ御訴訟に罷出申上候は：(略)：水戸橋より御屋敷表御門迄昼夜相詰罷在候事、仍て勘十郎父子御暇被下候

と、「三千人」という数が記されており、当時の噂を窺知ることができる。『一睡記』に見える人数もこうした噂を踏まえているのであろう。ただし『一睡記』に「二十カ条」とある訴状は、実際は二十八(あるいは二十九)カ条「南領北領統一のもの」であ

中らと対立する、という図式を描く。前述の桑名騒動とも言われる野村事件にしても、著名な御家騒動の加賀騒動にしても、後世に流布する実録類では、御落胤だの男色だのと潤色が著るしいが、結局は経済的窮乏に起因している。野村増右衛門や大槻伝蔵は単に奸悪な人物とされてしまったが、問題は一個人に帰せられる程単純でないことは史実を調べてみれば、感知し得る。水戸藩の場合も同様で、苛政というも松波一人の責任とはし得ないのである。当然藩主綱条の失政であると言えるし、松波の改革ニ新法に對しても賛成派と反対派が存在していたであらう。前述の如く、江戸出訴の際、百姓達は藩主への直訴の前段階として分家の守山藩主松平頼貞へ訴状を提出むという作戦をとる。その理由については、『御改革訴訟』には、

一上吉影村藤衛門申上候へ此度御 公方様御他界被遊候段国元ニ而不奉承罷上リ申候所御当地にて承候ニ付乍憚両 殿様御儀へ御忌之御内ニ可被遊御座候へ共上ハ御一体と奉存ながら大学頭様之儀ハ御連枝様之御儀ニ御座候へは可然かと奉存：

と、藤衛門の口から弁解させている。百姓達が本当に綱吉の死を江戸へ来て初めて知ったのかは不明だが、何故「御連枝」の中でも特に守山藩主へ訴えたのか疑問が残る。また頼貞の方も、一度は脚下したものの結局は百姓側の言分を認め、百姓側の全面勝利を導くのに大きな役割を果し、結果として百姓達の作戦は成功したと言える。この場合の頼貞の百姓達に対する好意的な態度を異様とする見解（『水戸市史 中巻』）もある程である。そこで「守

山藩主松平頼貞は、かねてから松並勘十郎とその藩財政改革には、きわめて批判的な人物であらって、百姓達が特に頼貞を選んだのは「かれが、かねてから松並改革の手きびしい批判者であること」を百姓側がキャッチしていたからだ」という穿った見方も出てくる。史料からではこの点を窺うことができない。しかしいづれにせよ、頼貞が百姓の味方であるかの如く他人には見えただであらう。少なくとも水府宝永一揆関係の諸記録を見る限り、そう見える。(15)『一睡記』の場合で言うと、高師直が綱条、細川頼之が頼貞にあたると思えられることは前述した。全体として見れば赤穂義士物である『一睡記』において、師直がひたすら悪人なのは当然と言えと言えぬのだが、師直ニ綱条と考えると、前述の甚十郎ニ勘十郎とあわせて『一睡記』の作者の批判精神をある程度窺うことができよう。同時に百姓に対しては同情的な立場の頼之を清廉潔白な理想的政治家として描いているのは、水府宝永一揆における頼貞の役割を作者が評価しているものとも読み取れよう。頼之を理想化している点を挙げると、『一睡記』巻一ノ四「貯の金銀を以て加茂の堰を築事付タリ沙門の憤によつて無実をすゞ事」がある。これは既刊の浮世草子『近士武道三国志』（正徳二年正月刊 作者不詳）巻八ノ九の野村増右衛門事件を扱う章の中に、細川頼之が町人の訴えを裁くに誤審があつたことを自ら認め、三千両を投じて賀茂堤を築き大杭に自分の過失を書記し、これを「頼之堰」と呼んだというエピソードが記されているのに依つたものであらう。しかし「誤審」というのは頼之を理想化するには不適當であつたのか、『一睡記』ではそれに言及していない。頼



之が、真言寺の衆徒より賂を受取ったという疑惑を晴らすため、加茂堤の普請の際大杭に「細川頼之貯の金銀をもつて。此堰を築ものなり」と書記すと、逆に驚いた衆徒が無実を訴える。すると、「尊氏卿も驚き給ひ。頼之が潔白なる事を。今こそ世にしり渡りて。忠臣の心を感じぬ。」というように改変している。

『一睡記』は赤穂義士の世界を借りながら水府宝永一揆を仕組んだため、巻五の塩治判官の刃傷から四十七士の仇討までがやや蛇足といった観がある。時事小説禁止令が出される前の作とは言え公刊本の性格上事件をストレートに取上げることは無理であった。しかし全体を師直の悪事を強調する方向でよくまとまりをつけている。

## 五

宝永水府一揆関係の諸記録類は、支配者・被支配者両側のものが存している点でも注目されるが、後者では当然と言えば当然だが、百姓側の代表、藤衛門なる人物が先頭に立って活躍する。しかし『一睡記』では百姓の中にそうした顕著な人物は登場していない。作者の筆致は百姓側に同情的ではある。が、佐倉惣五郎伝承が典型的に示すように、百姓側の代表者を英雄視する方向へ展開するのはやはり写本ならではのことであった。

なお冒頭に林氏が書名を挙げた『百姓盛衰記』（正徳三年二月刊）と『農民太平記』（刊年不詳）もやはり実際の百姓一揆をモデルとしていふと考えられる。特に前者は林氏の指摘する野村増右衛門事件の他に、水府宝永一揆をも取込んでいふと思われるの

であるが、この二作品については別稿に譲りたい。

注(1) 『浮世草子の研究』第二章第六節「正徳の浮世草子」（昭和四十四年 桜楓社）

(2) 『享保と寛政』「宝永・正徳期の動向」（『国民の歴史』十六 昭和四十六年 文英堂）

(3) 表記は「松並」「松波」の二つあるが後者に統一した。

(4) 『茨城県史研究』二九（昭和四十九年八月）以降「松波勘十郎搜索」を連載

(5) 『芸備地方史研究』六九・七〇合併号「三次藩の農民闘争」に紹介の『久光家伝之筆記』（広島県久光元臣氏蔵）

(6) 注(2)に同じ

(7) 『御改革訴訟』考―近世史科学のこころみ（『近代日本における歴史学の発達』上 昭和五十一年 青木書店）

(8) 注(4)「松波勘十郎搜索(二)」に紹介あり。明治四十年鈴木仙坡編。巻三（肅公時代）に「松波勘十郎のこと」の項あり。写本を駆使した史料集成。

(9) 『越訴 水戸藩・宝永一揆の謎』長須祥行氏（昭和六十年 三一書房）本書は専門書ではないが、地元の口碑を多く集めている点が興味深い。

(10) 以下引用は全て注(7)の林氏翻刻による。

(11) 以下引用は全て『共立女子短期大学文科紀要』二三の中 山右尚氏翻刻による。

(12) 「天下泰平武家繁昌之事」なる序章に以下の如く言う。

頃日、日光邸鄢枕と言書物出たり、是を手本にして鎌倉三代記と言板行本出来たり、則御当家を作りたる書なれ共、

故障を憚りて古代の書に作り替たるべし、爰に願す一通りは、乍恐其事遠慮なく元禄年中之間、世上の雜説を集め、神田花割菱の御発向ヨリ書記せり……

(13) 『民衆運動の思想』（日本思想大系五八）「宝永水府太平記」解題（昭和四十五年 岩波書店）

(14) 注（9）に同じ

(15) 林基氏『水府松並評』小考（『中村幸彦著述集』月報

11 昭和五十八年 中央公論社）によれば、民衆側の記録のうちでも特に『水府松並評』は頼貞を聖化する傾向にあ

ることを指摘し得るといふ。

#### 〔付記〕

本稿をなすにあたり、資料の閲覧につきましては、国立国会図書館、都立中央図書館加賀文庫、早稲田大学図書館の御世話になりました。また貴重な御教示をいただきました前田金五郎氏、高橋圭一氏に深謝申し上げます。

一六二・三・二〇一

#### 新刊紹介

復本一郎著

#### 『本質論としての近世俳論の研究』

本書は、著者による俳論研究の集大成ともいうべきものであり、俳諧史を〈和歌離れ〉〈和歌一体化〉の相克の歴史と見る点、『竹馬狂吟集』序文以下の近世俳論を広く視野に入れている点に特色がある。論文篇は二十四章からなり、俳論史を以上の点から再検討した上で、伊丹風・鬼貫俳論・芭蕉俳諧の笑い・風雅の誠・位など、俳論の本質に関わる諸問題を綿密に考究する。資料編に収める『去来抄解』および淡々本『去来抄』〈故実〉、注釈篇の『鬼貫旅日記』

評釈は、いずれも著者の立論と密接に関連するものであるが、新資料の紹介、未注釈文献の注釈としても有益である。「俳諧とは何か」を明らかにとする著者の姿勢は終始一貫しており、共感を呼ぶものである。

（昭62・4 風間書房 A5判 六三七頁 一二〇〇〇円）

〔佐藤勝明〕

服部撫松著・山敷和男解説

#### 『定本絵入世夢想兵衛蜘蛛物語』

江戸期漢文体庶民文学類載の第一冊目にあたる。書名が示すごとく滝沢馬琴の読本『夢想兵衛蜘蛛物語』を踏まえて、その二世を明治開化の世に登場させ世相風刺を試みたのが本書である。山敷氏は既に「東京

新誌」連載の初出誌を用い校注を加えて同名の書を世に送ったのであるが、今回は初出誌を大幅に加筆訂正して刊行された単行本を収めたのである。解説では撫松の略歴を語るとともに、雑誌初出と単行本との比較を掲げている。そこでは最も大きな違いとして明治政府批判が弱まったことを指摘している。これは同氏の名著「論考 服部撫松」に語られた撫松の筆の衰えを実感させるものである。

本文は写真判であり、当時の香りをそのまま味わえるようになっているし、当時の流行語を中心に語注もほどこしてあり読解の助けになっている。

（昭62・3 朋文出版 A5判 百六十八頁 三八〇〇円）

〔佐々木亨〕